



アララン
心の冒険
(下)

高村 昌憲 訳

第二十一章 もしも賭けの情熱も一つの情熱であれば

賭けにおいては全てが明瞭です。賭けには決して幻想がありません。望んだエースのトランプを与えても、自然は私たちに従うのであるとしか信じることが出来ません。けれども勝てば自慢します。如何なる力も私たちはそこでは等しい様には見えません。しかしその力は常に危険があると人は言うでしょう。その力が生きているのはその中です。百万フランも稼いだり失ったりする準備を自ら行う人間の力には、同等の陶酔というものは決してありません。活動の中でこの精神の平静に至る者は、運命を超えて存在していることを自慢することが出来ます。ここに情熱の土台を作る不安の雲はありません。全てを作るのは自我です。決めるのも自我です。確かにそれは自尊心の勝利であり、自分の意志を必要としています。それ故に賭けから解放されること以上に簡単なことは何もありません。賭けをする人々は、そこから別れるだけで十分なのです。それは私たちの人生そのものでした。それで、このことはもう何も考えません。この地点を過ぎた人間は、危険に対する幸運を使い尽くしました。彼はすっかり大地を耕す準備をします。その人間は新聞王とか銀行王に二回なることはないと言えるでしょう。実際に彼はそうになりましたが、嬉しくそのことを考えます。酷い戦いだったので、そのことには最早興味が無い人間なのです。実際に彼は組織立てる喜びを使い尽くしていたからです。それは、もう一つの生活であったと心に言います。それは自分の次に来る一種の天使です。バルザックの小説『ベアトリクス』の最後でラ・パルフェリーヌにマキシム・ド・トライユが行う様に、正しい忠告を与えるのであればもっと幸せです。この悪の天使は愛されます。恐らく唯一の愛されている者です。私は次の様に言っていた賢人と知り合いになりました。「昔、私はどんなことでも理解した。しかし、前のことは思い出さないのだ」。賭けて確実に勝つ人に成るには、それ故に最早情熱を無くすことです。お金をつまらないものにするのは彼のためです。交換の浮沈は最早彼の心を動かしません。最早皮肉でもありません。彼は歳を取り社会的になります。彼に陶酔させた人生を示す諸芸術を彼は屢々愛します。自分によって管理されるのが幸福です。幸福を再び熱するのは冒険しかありません。情熱の無いこの野心をまさに認めなければなりません。（完）

に劇場を超えて、その行為の中でしるしを変えることにありますが、しるしの性格を行為によって止めてもいます。彼はその時、手を伸ばして、欠伸をして、深呼吸をする様にして幽かに進んで眠りに戻る気を起こしますが、普通それは眠りたいしるしの代わりになっているものでもあります。（完）

（1）ブルセ（一七七二～一八三八）は、医師で、病気は極度の刺激や興奮によるものであるとの説を主張したが、一八三二年のパリのコレラ流行で見捨てられた。

第二十三章 気分

〈気分〉はその名に値します。何故なら、それらが洗い落とすか、妨げるか、苛々させるかに応じて、私たちの気分が運ぶもの全てで釣合いが取れていて、私たちの決心を無視して変わり易くさせるのが気分であるからです。しかしながら気分は運動を司る筋肉にも依存していて、それらによって私たちは少なくとも意志を殆ど絶えず試みています。例えば私たちは態度を変えますし、両手を広げますし、こっそりと逃げ出しますが、これは気分を質問したり、正確に触診したりすることに戻ります。何故なら運動を司る各筋肉は、心の機能に関するものも何かあるからです。しかしながら少しも規則的になっていません。筋肉の収縮は血液を押し出しますし、筋肉の弛緩は血液を呼び戻します。更にその連続した動きは、それが働いている部分を必ず赤くさせます。これは血液が流れて行かないと、肉体の部分に注意出来ない点まで行くことを生理学者たちは言っています。実際に或る部分への注意は、運動を司る相当の筋肉を前もって訓練することでしかあり得ません。もしも注意が血液のある場所にあるとしたなら、あるいはその逆であるとしたなら、昔からの論争が求められるのでしょうか。しかしこれらの二つの類似したものは受け入れなければなりません。そして意欲はこれらの方法を絶えず確保し常に異物に反応するのですが、別に望んでいる訳でもない人間のこの感じ易い肉体を絶えず探究することを理解しなければなりません。かくして単に部屋の中を歩く様に見える人間も、実際は自分の態度を示そうとする気分はどの様なものかを探しているのです。普通は、上機嫌をこれから演じるだろうということを彼は演じます。でも、子供たちはもう自分の気分だけに素直に身を投じます。子供たちの気分は自分勝手に大きくなって行きますが、直ぐに飽きて仕舞うことを誰もが知っています。それは役割に対する長い経験によって形づくられた人物たちと同じものです。彼らの役割はまさに無意識の動きを絶えず望むことであり、彼らは咳や嘎れた声や全身の形状と異なる髪の間から出来ている様なものです。しかしながら彼らは同じ事を繰り返して言うことに従います。何故ならどんな態度を取ってもその役割のために繰り返し言わせられるからです。そして他方で、疲労が彼らの足取りを変えるのを強制します。つまり気分が変わります。ところが何か他の見方を表すための機会を手に入れると、その人は生きる術を知ります。愚鈍な人は、気分と口調と言葉の意味を一致させる術を知りません。彼は陽気な観念を悲しくさせます。あるいは或る人々が十分に知りもしなかったのに真面目なことを笑い始めたりするのを見る様に、彼は自分の悲しみを楽しみます。会話の難しさの一つは、気分が望んでいるのと同じ位に早く崇高さへ移ることです。私が崇高さのことを思考するのは、気分から思わず飛び上がったものである笑いと涙がここでは、例えば殆ど暴力のように生じるからです。そして涙は大きな不安のしるしですが、それを乗り越える崇高なものでもあるからです。笑いも事情は殆ど同じですが、際立っていて気まぐれです。まるで真面目さの行き過ぎに対して身を守り始めたかの如くです。思考する術と話をする術は、これらの対照から生じます。各々が微笑を調整します。笑いも同じです。笑いを無意識的な部分にするのも同じです。でも、涙は調整されません。しかしながら遠くから涙を予測することはあるかも知

れませんし、涙のこの潮の力を逸らせることはあるかも知れません。その人間は自分の情動が徹底的に流れる術を知っています。でも、それらの情動を命令して蘇らせる術は知りません。しかし彼は命令して音楽と詩を持っています。そして声も持っていますので、雄弁とか冗談を絶えず準備します。彼は深淵を超えて確固たる声を届ける術を知っています。それは不安定な気分とは逆の方へ向かいます。彼は崇高さの一点で名誉を編む術さえも知っています。そのことは意志と誓いと忠実さを強調します。反対に歌は感覚に大変寄り添ってついて行き、魂が機会を窺っていることを表します。情動が何らかの意味で自発的であり、そして如何にして私たちはそれらの情動を変える力を持っているのかを少なくとも思い出したいと私は思いました。ダンスと音楽はその表現によって、印象を適合させるための一般的なやり方に対応する芸術なのです。（完）

印象は、どんな思考よりもそれ以前の情動を大変良く明示する言葉です。その激しい驚きは肉体からの印象や反応そのものによって、肉体に行使されるより高い段階の激しさを表します。この衝撃的な言葉は、もっと正確に言うなら、私たちの人生がそれでも精神的平静さを失うしかない事件によっても脅されることを表しています。取分け赤面や蒼白さや震えにあります。常軌を逸した心の結果であると、その様な混乱に対しては私たちには間接的な行為による方法しかありません。それは、痙攣、収縮、ひきつけ、その他に息を吸ったり吐いたりする自然に行われる運動とは反対の活動のものの一つです。これらの二つの方法は、言語全体の領域を覆っています。そして、その表現は身振りや声によってその領域に感じることをつけ加えること、配分すること、準備すること、大きくすること、小さくすることにあります。私たちの理解範囲から大変に遠い器官である心臓についての雄弁能力は、如何にして筋肉の伸張と息の規律が心臓の鼓動を規制出来るのかを理解しない限り、魔法のようなものと見做さなければなりません。歌と詩と雄弁はこの不幸を整備することに貢献します。しかし、その美德は言葉そのものに広がるに違いありません。そして、それらの言葉は荘厳でもあります。もしもその言葉が行為しか適合しないとするなら、常に大変に荒っぽく要約されたものに戻ります。反対に、もしも言葉がどんな音の織物にも発展したなら、それは既に朗誦であり詩であります。詩は又、音響にもっと近い処から見ることにしか行いませんし、律動と韻によって生まれます。これらの方法は既に、私には要約と命令であるアクセントと全く反対の様に見えます。その代わりに律動と韻によると、気分の平等が無ければ調和しない、価値観の平等が確立されます。私はそれに予感を感じると命名します。しかし何故微妙すぎる言葉なのでしょう。それは私が言った諸段階の問題について感じるということに関する一種の定理を只期待するだけのためなのですが、非常に隠蔽されているのです。それによると朗読者の崇高な情操によるのです。決して情動ではありませんし情熱でもないので。それは意識が些細なものではないということであり、些細なもの合計でもないということです。それは前もってあらゆる場所と時間のための思考の全体です。そして、それは私たちの思考の中で単純な恐怖に通路を与える巨大な抜け穴です。私は、一つの心配が如何にして私の恐怖になるのかを別な風に理解しません。この表現にはそれ故に希望と予感に取り巻かれているものがあります。そして、それは虚空そのものによって崇高さへ赴きます。その様なものは情熱のための場所です。しかしそれが情熱の巣窟であると言うことは出来ません。息吹で一杯のその重要な場所は、それらの情熱を熱望したり撃退したりしているからです。以上は文字通りに朗読者の状態です。朗読者は生き返るために死のうとします。どんな詩も常に澄んでいて静謐な終わりへ行きますが、その時は詩にしかない時です。それらの困難な通路は過去の状態でしかありません。それ故に情動も大変に重要なものなのです。

親愛なるアブネル(1)よ、私は神を恐れるが、それ以外は決して恐れぬ

以上が恐れです。言うことなのです。私が恐れるのは、言うことなのです。でも、恐れない私とは、多くのことを言うことであり、全て言うことです。その上、言葉による情動は私たちに感じることが与えられるもの全てです。二度と感じられないのです。魂と肉体が葛藤する時しか感じられません。その様なことは詩の秘密です。従って、つまらない詩は決してありません。強く感じるために海や四季や数々の年代や、幾らかの言葉に広がるものは、どんなものでも求めて行かざるを得ません。結局のところ、悪化させられてはならない素材として言葉が考えられるや否や、言葉には宗教的なものがあると言わなければなりません。反対に形式として考えたなら、人は言葉を変えます。何故変えてばかりしているのでしょうか。馬鹿者の言語は何時も言いたいことを望んでいる足元にあります。しかし、賢者の言語はその上にあります。例えば諺の中です。決して変える必要がありませんが、繰返して言わなければならないのを私は知っています。詩は一種の諺の完成です。かくしてヴィーナスが乗っている帆立貝の形をした法則によって、強く感じる機会を与えているのです。（完）

（1）アブネルは、聖書でサウル軍の将であり、ライバルのヨアブに殺される。

ダーウィンは情動を表現すべきものとして論じました。行為の前触れのしるしを言いたかったのです。例えば馬の耳や尾の動きであつたり、あるいは犬の多くの動きです。この種の表現は無意識的なものです。ダーウィンは各々の種属の中で自分を訓練して、数々の種属に入っていきます。そこから動物たちが話をしていると、大変早く結論が下されました。動物たちが社会を形成していることも大変早く結論が下されました。本当の言語は自分から自分までのものです。そして同時に、私たち自身の人生を構成する確信されたものとして展開するので有効なのです。韻律やリズムは装飾音として言語にはつけ加えません。でも、それらは自分の言語において不可欠であり、同時に社会を保証しています。言語は絶えず下準備をしていると言えます。それは待つて期待出来ることを告げることです。聴衆を生むものです。お喋りをすることは、全ての弦を試みて演奏する前奏曲の様なものです。従つてお喋りは情熱を解いて解放します。その中はまさしく様々なざわめきだらけですが、逆にそれは熟考も抑制も無く伝達して行きます。その時は誰も自分のことを話しません。動物的な状態に戻ります。各人がそのことを知らずに興奮して誰も自分の存在を評価しません。「もしも私が良く望めば、それ故に興奮するでしょう」とは誰も自分に言いません。この契約が結ばれるや否や、沈黙の美点と好奇心の不在が見出されます。しるしに従つて生きることに十分な幸福を見出します。どんな人間もぞつとする恐い考え、廃墟、幽霊、呪い、死が整理されて探検出来る条件ならば、それらを楽しみます。その代わりに私たちは即興的に攻撃します。最も恐ろしい物語には常に変化の土台に役立っている物静かに話す声があります。それは過剰なものを拒んでいる声です。音楽にも同じものを発見することが出来ます。それはゆっくりとした演奏の中にしかない大変大きな感動です。それ故にお分かりのことと思いますが、表現とは先ず自分自身が感動する力を表すものです。それは止まり、そして延ばすための継続した試みを意味するものです。そこから分かるのは、装飾が言語においては付随的なものではないということです。装飾は、それを感じるには自発的なものがあることを意味しています。

これらの考察は、情動以外に他の感情には決して無いものであり、まさに情動が自発的であることを理解させるのです。ヴァイオリンとかマンドーラ(1)が必要ですが、音楽の音が自発的である様に、情動も自発的です。反対にそれらの音が自発的であるには、ヴァイオリンとかマンドーラが必要であるからです。同様に私たちは言語を選択して演じると直ぐに、間違いなく言語に基づいて演じることが出来ます。そして、これらの感情のどんな種類のものも、感じるのを望むための条件により命令されます。それは人が決めた限度を常に多少なりとも超えています。自分のことを考えたり、自分の力を試すこの楽しみが無ければ情熱も無く、まさに不幸に違いありません。情操にとっての美は英雄的です。情熱もそこを狙いますが到達することが無いために、情熱でしかありません。それはまるで不協和音が自分から発せられたかの如くです。表現はそれ故に情操と同じものです。私たちが思考するのと比べれば、情操には幾つかの規範があるのです。情操は、情動が伝えられるものを表現する様に、一時的に定義させることが出来ます。

しかしながら情操は、出来の悪いヴァイオリンをストラディバリ(2)に変えることよりも崇高で清い情動を私たちの存在に与えさせる力に、沢山ある訳ではありません。少なくともその調和は、人間の肉体を通り抜ける混乱や意外な反響ほどに人間の肉体の構造に依存しません。情動は、血液と呼吸の締付けに従って広まります。私たちは自発的に振動します。それでもそれが怒りとか恐怖に代わるものでしかない時、僅かに崇高な豊かさを何時も自己から引き出すことが出来ます。そして、それは俳優が私たちに教えてくれるに違いないのです。情熱は劇場で狂人たちを生みません。完全に巨匠でないかもしれないけれども、過剰そのものや最も大きな間違いが主張されたり予測されたりする私生活においても、情熱は狂気を生まないのです。(完)

(1) マンドーラは、リュート属の古楽器で、十八世紀にこれからマンドリンが生まれた。

(2) ストラディバリは、イタリアの楽器製作者の名手A・ストラディバリの手になる楽器の総称。

第二十六章 愛の情動

もしも動物的欲望が日常生活に干渉したなら、最早狡くて大変に不快な戦いの儘にして置かないためにも直ぐに日常生活を中断させて、どんな信頼も取り上げます。その時は愛からは非常に遠い処にいます。愛の情動は先ず欲望を排除して、それから反対に楽しくて気楽なものを全て取り戻し、言葉に重みを与えたりしません。子供が美味しい食べ物を貰って子供の中で行われていることに従う情動を、その様に想像するデカルトは正しいのです。かくして人はほっとして顔を赤くして、微笑して、愛の中で花を咲かせて、どんな疑念の思いも取り除かれて、そして全てが計画されて、人物たちについての如何なる判断力も持ちます。少なくとも幸福であり、そして全ての完全なものを信じます。例えば、二組のカップルが僅かな幸福を悪人たちから奪うために理解し合うための会談において、愛人たちの一人の男性が、もう一人の恋人も大変に美しく彼が自分の恋人を見る様に全く崇高な愛を見ることは、一般的に良くあることです。全てのカップルの愛人たちは各カップルによって愛されているのです。少しも愛さない人々を本心から同情されていることに人は気付くことができます。ところが愛においてのこの素晴らしい信頼を許すのは、純粹さしかありません。そしてその愛は、愛という神を生みました。別な言い方をするなら、それは恐るべき雑役であり、そこでは名誉が命令され、滑稽さが脅しているからです。欲望は直ぐに最も生き生きとした嫌悪の姿となるからです。もしも何も存在しない夢想の中に欲望があったなら、存在するものはこの活動的な想像力を直ぐに消すのであると言えます。そして快樂への試行が最も危険で恐ろしく、真の愛を見る眼には最も当惑させるものがあるのは本当であることに変わりありません。そして、その愛は先ず力と自由を試して、そして裏切ることの無い全く単純な言葉と言い方から幸福を引き出します。そのことは私が如何なる強制も無く力を行行使し、同時に幸せに思う服従を気に入っていて、従って情動に対する調和が非凡な動悸に一種の詩を形づくるのであると言いたいのが私は好きです。恐れることなく快樂を従属した下位の機能に追い込むことは、決して心配していません。この詩は、全ての詩の様なものです。自発的な意志がなければ書かれませんが、従うことの幸福を、他の人々と一緒に歌うこと、そして他の人々の声に基づいて自分の声を支えることの幸福と比べなければなりません。それは素晴らしい注意力を前提にします。同様に無意識の陶酔も望むに違いありません。そして崇められた情操の中に情熱の部分も結果として超過してありますが、それは想像を絶する幸福の中でうっとりさせます。そして、それは私が先ず注目したかったことです。何故なら被害を与える者たちや略奪者たちは、それが可能かもしれないと考えることさえもないからです。二つの手と手が合って絶頂にまで行った肉体的な情動においてさえも、愛は未だ精神的です。あるいは、お望みなら音楽家の様なものなのです。(完)

第二十七章 野心における情動

その他の情熱には機能や器官との結び付きはありません。それらの情熱は、それでもなお激しいものです。それでもなお急病人の性格を全て持っていて、人間の肉体に関してのその後の状態です。そして最も劇的な愛のその進展は、欲求や満足感や快樂に依存するのは非常に少ないと信じるように仕向けることなのです。しかしこの主張は全てが逆に言われる様に、そして虚栄心は多くの動物的快樂に関わる様に、野心を持った肉体に大変近い処で調べなければなりません。そこではこの種の快樂は何ものでもないことが明白です。それでは野心を持った肉体とは如何なるものでしょうか。それは服従するとか命令することが重要になるや否や、自分の同類を前にした人間の最初の反応です。それは幾つもの外観を呈しています。その人間に謂わば鎖に繋がれているとか、強制されているとか、足を押さえられている私は、無力な怒りや屈辱を感じます。そして、私がそのことを思い出す度に、同じ反応が戻って来て私を鎖に繋ぎ、無力化させて侮辱するのです。単に私のことを考えなくとも、暴君に関する単純な見方が私を同じ状態に投げ入れるのかも知れません。従ってそのことを考えながら私は、野心に場所を持つことが出来る、一種の怒りとか憎悪を作り上げます。恐らく私は、暴君やそれに似た者たちに最も恐ろしい体刑を課すでしょう。如何なる復讐も十分に残酷ではない様に私には見えます。従って野心への反動は、恋する競争相手たちと同じ激しさへ容易に向かうでしょうし、雄鹿や犬たちと同類のものによって説明する様に強く主張します。野心には将来においての喜びは無く、対応する必要性も無ければ、十分に大地を血だらけにするのである以上精神的な愛は殺したいと思います。そして殺すまで激しくなり得ると言うことに戻ります。

しかし私はここでは復讐が体刑であるとか、体刑への恐怖の結果であったと述べるだけです。野心の競争には他のものもあります。それは肉体によって表現されますけれども、精神に由来するものです。それは納得させることの幸せであり、一人の人間の理性が理解されることから生まれるものです。そして、その人の精神の先生と知っている只それだけで生まれるものです。私はそれを肉体のものであると言います。その意味でまさに私のしるしが視界を塞がなければなりませんし、少なくとも他のものがそれらを見ないかも知れないことはありません。重要なことは、胸や肩や声によって自分を大きくする方法です。その動きは、牛と同じになりたいと願った寓話の中の蛙に大変良く表れています。それ故に野心には常に、少なくとも息切れの名残があります。期待したかったり相手の無知にびっくりしているのを意味する口から出る短い嘆息は、聴覚障害や視覚障害になった様に見えます。以上のことからお分かりの様に、野心家は聞いて貰いたいし、見て貰いたいのです。そしてそれが真似をしている音楽家であったり、あるいは他の誰もが競うことが出来ないかも知れない時、注意が他の方へ向くことが野心家には我慢ならないのです。野心のこの情熱には、大きかったり小さかったりする障害が幾つもあります。従って孤独の中ではその情熱が大きくなって行くことが起こります。臆病と葛藤することが予想されます。思いつきの方法では十分ではないと分かっても、臆病がその時感じるのは怒りです。そして、そ

の人から私が気付くことは、野心家は打ち勝つことが余り好きでなく、手腕や才能でもぎ取ることでも好きではありません。滑稽であるけれども感嘆に値することなら何でも構わないと言えるのを彼は望みます。前代未聞の様に思えるこの意図は、実際は非常に一般的です。それは私たちから、低い野心を永久に取り除いておられます。それは隅で胸を張っていても、何本もの指で軽くとんとん音を立てて幻滅を表します。そうです。でも、野心のこの回り道そのものは、偉大な者たちが殆ど全て間抜けでもある理由を説明しています。何故なら、もっと気持ちの良い管理に戻すためには、間抜けでいることは彼らの訓練になるからです。でも、もっと野心家を述べることを私は主張しません。単に私は歩き振り、誇張、頬や眼の輝きを思い出したいのです。それらはしるしよりも非常に良いものであり、それは寧ろまさに野心の内容なのです。

恐らく、自然主義者を馬鹿にする代わりに、野心家は屢々大食漢であり、他のものから自分の実質を作り、それらに自分の法則を押し付けます。そして野心家は本当の肥満を連れ回して現実二つの仕事を占めているのは道理に叶っている、とつけ加えて言うのを人は忘れないでしょう。それは、そう言うべきですが、従属している下位の仕事の中です。最も力があって明らかにする素晴らしいしるしは、やった者のことであり、やり通す者のことです。例えば大きな頬をしているよりも寧ろ頬をふくらませていることとか、大きくもないのに大男のように歩くことです。痩せた野心家は一寸した人物です。

しかし、それでは野心の最初の活動とは如何なるものでしょうか。恐らく界限に突進することであり、衝突を恐れることであり、傷付けられることであり、圧迫されることですが、臆病者たちの方法ではありません。臆病者たちは洞窟の中に彼らの血を隠しますが、全く反対に危険に向かって歩きますし、苛立っている場合にそれを行います。勇者や喧嘩好きな人の様な者は、始めは野心家です。彼の肉体的な特色は沢山の地位を占めいていますが、容易に侮辱もされます。その野心家を傷付けない様に屢々時間が潰されます。屢々彼に仕事をやらせて置きますが、彼の口論が絶えて残念がると思うことも無く、人は何時も嘲笑した者によって最後には管理されます。以上は野心家の本質とその裏を作る織物とその機能に関する素描です。この描写には順番と始まりを見出すのには不足しています。しかしながら皆を自分に専念するまで、それらのしるしを大きくする子供たちは、未だ望んでいるものが分からなくても、まさに早熟な野心家と思われれます。しかし子供自身の騒音で世界に鳴り響かせているのです。それらのしるしが聞こえなくなると、一人ひとりの子供は狂ったような怒りに気付きました。そして両親や乳母を罰するための奇妙な努力に注目しました。野心家たちは何歳になっても病人になったり自殺するまで行くのでしょうか、それは寧ろ他人に対して注意するための権利を放棄することなのです。(完)

第二十八章 吝嗇における情動

吝嗇は全てを保存したいし、何も食べたくありません。吝嗇は蓄えますし、消費しません。同様に、豪華な食事に際しての肉体そのものの準備の様に、野心に関しての生理学を述べるのが出来ます。同様に、消費と支出の機能を全て減少させながら、吝嗇家の肉体を述べるのが出来ます。抑えた呼吸、小さな声量、凹面の胸骨、何も無い分泌、拒んだ注意力、握った両手、折り曲げた両腕、折り曲げて縮めた肉体、ついには後ろ脚を伸ばして背を丸める猫と全く反対です。吝嗇家には謙遜するものがあります。しかし、この謙遜は秘密であり、それは屈辱の拒絶でもあります。それ故にその値は精々半額です。そして沈黙であり、わざと痩せていて、実際の弱さによって表現されます。しかし私は現在、この人間からの変わることをない逃走しか注意しません。その逃走は説得することも伝達することも全く望まず、それ故に当を得た利益しか信用しません。この情熱は虚栄心が入り込むことは無いのです。その情熱を理解しないで彼に従っても、気に入られることはあり得ません。それ故に吝嗇家は、浪費について恐怖しかありませんし、吝嗇家たちの社会しか評価しません。雄弁は吝嗇家たちにとって完全な敵であることが分かります。彼は騒ぎさえも好きではありません。彼は静かに笑います。赤褐色の煙がゴブゼック（1）の皺から出ます。かくして彼は笑います。吝嗇家は目立ちません。単に盗まれるのを恐れるからばかりでなく、内から外へのあらゆる活動が怖いのです。真の吝嗇家は聾者や啞者にならなければなりません。啞者になることは財布の様に口を閉じていることです。例えば吝嗇家は値段を決して言いません。それは単に人が付けた値段が恐らく一番安いものになって得をするからであるばかりでなく、第一に吝嗇家の値段は秘密であるからです。値段を言うことになれば何かを与えることになるからです。吝嗇家は食べることも飲むことも、同じ様に得であるとするかも知れません。しかし、それでもなお自分だけの量で楽しくなるまでです。吝嗇家は無駄な動きをしないで歩き、人々の中に滑り込むのを人は見抜きます。吝嗇家に好まれる職業は、印刷屋、時計屋、版画家、代書人です。吝嗇家の文章はぎっしりと詰まっっていて、規則正しく、空白が無く、飾りも無く、余分な表現もありません。老人は経済活動や節制によって少しは吝嗇になる危険があります。虚栄心の無い生活はどんなものでも、その意味では吝嗇です。逆に吝嗇は世評に価値を決して与えません。高価なポスターやちらしを拒絶します。その代わりに野心家は例え辛しの様な効き目が最早無くても、壁に自分の名前を読むと幸せになります。実を言うと野心家の行為は歩く方法に執着します。吝嗇家も同じです。それでは愛の身振りとは何でしょうか。恐らく彼という存在を消費したり与えたりすることであり、歓迎されている微笑が大変に美しいしるしなのです。野心家は、貪り食おうとすることを意味しないならば、微笑する術も知らないからです。勿論、情動が何であるか理解させるのも、もう沢山なのです。

吝嗇に関しては、お金を支払う難しさが与える困難と同じものがあります。同じ有利さでの交換には、少しも幅を認めません。そして財布を開ける便利さも認めていないことに人は気付くことが出来ます。本当の吝嗇家は、自分自身のお金よりも、管理している財産に基づいて他人の支

払いをもっと容易に行うことにあると私は気付きました。同様に、高価な貨幣に対する吝嗇家の偏愛も、もっと骨の折れる支払いを返して貰うのを目的と見做しています。軽率はその故に吝嗇家には最も恐ろしいものです。従って大事業によって大きな危険を齎す者たちは、吝嗇家たちよりも寧ろ野心家たちであると言わなければなりません。一度に大儲けしたり破局の可能性を引き寄せた賭けをする人たちは、寧ろもっと野心家であると言わなければなりません。その人々は吝嗇からは甚だ遠く、支配しているのはお金を使ったり与えたりするのを好みにすることです。お金によって管理する気持ちは、野心家たちと同様に吝嗇家にもあります。しかし、その方法が異なっているのです。従って吝嗇家の情動は、吝嗇家の情熱よりももっと良く認められているものです。レナル氏(2)は、お金の言及だけには眉を潜めていました。全ては彼の裡に閉じ込めていました。そして、もしも人が見たとしたなら、確かに彼の両手でした。しかし吝嗇家は自分の両手を引きずった儘にして置きません。どんな人でも返済とか代金の支払いが近付くと、従って自分に閉じ籠もりました。お分かりの様に何らかの意味で吝嗇家は盗むことが出来ますし、その術を知っています。彼は支払いを拒む術を知っています。支払いを忘れる術を知っています。翌日に延ばす術を知っています。発見したものを守る術を知っていますが、約束して騙し取ること、話をして心を惹くこと、小球を敏捷に手品の様に巧みに隠すことは出来ません。その軽妙さとお喋りは彼を怒らせますし、嫌悪を催させます。それに反して、鱈皮や昔の三重宝冠とか金額を削った昔の銀貨で支払うのは彼には幸せなのです。しかし、もっと多くの意味があります。危険は少しも吝嗇家の気に入りません。彼の気に入るものは、如何なる危険も発明も企ても活動も無く、儲ける機会なのです。その様なものは教会の入口のポーチにいる乞食と同じ様なものです。この不動性は炎のような表現法で情熱を描きます。ものを受け取るのに控え目であることは、吝嗇家がものを与えるのにも気に入るかもしれませぬ。この場合に、相手の無欲さに信頼して開き、そして再び閉じる手であっても十分に美しい一つの光景です。(完)

(1) ゴプゼックは、バルザックの小説『人間喜劇』に登場する老人で、ユダヤ人の冷徹な高利貸しである。

(2) レナル氏は、スタンダールの小説『赤と黒』の登場人物で、主人公ジュリアンとレナル夫人の仲を知る。

私たちの行為が如何に大変微妙な思考に屢々導かれて行くのかを理解させてくれるリシュリユーという枢機卿の行為を、私はレス枢機卿の本で読みました。レスは、リシュリユー枢機卿に保護されて父親でもあったラ・モス＝ウダンクール司教と共に、ソルボンヌの主張の中で一番目のものに敵対していました。我々のレスは伺候する好機を握っていて、そしてリシュリユーが枢機卿の名誉のために敬意を表し、進んで席を譲ることをリシュリユーに言わせ様とします。しかしリシュリユーは、ラ・モス＝ウダンクールが自分の能力で奪い取るつもりだったのだと言って大変に不満でした。怒ったレスは、一番目の地位に就いて敵になりました。しかし、少なくともその枢機卿の考えを検討してみましょう。私たちは庇護する者を助けます、とレスは自分に言います。それは恰も、私は私自身を助けたと言うが如くです。彼の失敗は私を傷付けるものです。私は立ち直ります。胸が一杯になり、恐がらせます。今私は、独りの愚者を送り届けることに多くの名誉があると考えなければならないのでしょうか。多分そうです。しかしながら、もしも私のことが重要であったなら、愚かさによって勝つのは好きではありません。私という人間はそこでは小さくなります。私は存在するのではなく、姿が現れるのです。私という人間が問題になる時、単に結果を与える人間と見做されるよりも、能力のある人間と見做される方が私は好きです。その時に私は自分を信じる事が出来ますし、唯一の方法で自我が無くても成功したと信じる事が出来るのは本当です。しかしながら、もう一人の軽率な者は全てを決定します。彼はそんな風にもう一人の彼を気に入っているから、私の役に立つことにはならないのでしょうか。私はそれ故に彼に従います。お分かりの様に、反対を許さない暴君の行為である最初の行為は、続けるのが容易ではありませんでした。同様にリシュリユーも、直ぐに競争相手を見分けながら正義を叩きました。野心家のこの疑いは如何なる愚か者も魅惑する度ごとに戻って来ます。何故なら、それは大した者を獲得したのではなく、明日の裏切りは構わないと考えるからです。私は本当に有能な人間の方が好きです。そうです。しかし、その人は私を裁きました。裁くこととは平等にすることです。その人は自分の財産の手段として私を雇います。その愚か者は恐らく明日は私を裏切るでしょうが、有能な人間は昨日から私を裏切っているのです。彼は私の能力を判断して、私の運命に従う決心をしたからには、そのことが言いたいのは彼が優れた才能に従うことであり、既にそのことを求めていることです。彼は人間を信じているのです。しかし愚か者に対して何を成すべきでしょうか。この推論は従って勇気の上で形成されます。この人間は自分を恐れませんか。おゝ、無礼な召使いよ！

賭けをする人は同じことを推理します。彼には好機が分かります。しかし、何時も儲かる方法を彼に与える魔法使いも分かります。しかしながら勝つこと以外に望むことが出来るのは何でしょうか。回り道をして負けることも望んでいると彼は推測します。それは不思議に彼が追い求めているものを明らかにします。彼が運命を追い求めて挑むことと、不確実性の中で敢えて行う勇気を楽しんでいることを彼は発見します。野心家の力は、運命に百万フランを投げることでしか

追い抜くことが出来ません。その様にして消費する力と勇気を出して行う力である自分の力を二回証明します。かくして彼は自尊心の情動に目覚めます。しかしながら彼は純粋な偶然に反対して敢えて行いたいのです。そして更に待ったりしないのです。それは未開人たちの家に送られた何らかの安物に賭けても、決して手にしないものです。彼は自分に、それが死ぬ時間であるかどうか知りたいと思う無謀な人の様に直ぐに答えたいのです。かくして情熱が発展し、ぶつかり、変わり、そして先見の明があるという絶望に達します。もしも私がそれを串刺しにすることに確信があるとしても、関心は何処にあるのでしょうか。その関心は殺すことではなくて、その法則そのものを強制することであると理解させることです。それは希望がより熟練した人に開かれていることを推測します。その時の力を保持していても、何も保持していないことになります。無知な人々を支配することは、最早支配していることにはなりません。それ故に何かに絶体的な優位を人は狙っているのでしょうか。それには一つの感覚があるのでしょうか。

それらと同じ矛盾は、子供によって非常に影が薄くさせられるのを時々心配しなければならない父親の野心に見られます。野心は子供を恐れなければなりません、それは許されませんし、望むこともありません。そしてそれによるなら、この野心は一つの愛であると言うのも本当です。兎に角、この愛が両腕の中に愛するものを閉じ込めることが出来ないのも事実です。寧ろその愛は愛することで解放したいのであり、大変遠くへ飛び立つのを見る時が幸せなのです。けれどもそれは愛されたいとか軽蔑されたくないとか思うことを、妨げるものではありません。しかしこれらの状況は如何なる愛の中にもあり、奇妙な問題を提示しています。どんなりシュリユーでも、自分の美德で愛されている方が良いか、あるいは反対に美德を知らなくて自分の主要な能力を働かせていなくても愛されている方が良いか、良く自問するかもしれません。又は、彼が愛するのを押し進めて行くことを考える時、自分だけの翼で飛ぶこととか、保護者が彼によって支えられているのをもっと良く見せるのを愛しているのかどうか、自問するかもしれません。それは「彼が彼自身によって存在しているのを私は望むのか、あるいは私によって存在しているのを私は望むのか」と尋ねることに帰します。どんな愛の問題も母親の愛が提示しているものであり、そして解決しているものでもあります。（完）

第三十章 愛の中の野心

大変に確かなことですが、愛の中には野心があります。他人の実体を心の糧にしたいという欲求は屢々愛と混淆して、与えるという行為を妨げます。例えば私が私の考えで子供を育てれば、子供の考えでなくなります。私の考えで育てるという考えは、私の名誉を求めることであり、子供の名誉ではなくなります。それは、その完成が私の称賛を助けると考えることです。子供をむさぼり食うために育てることなのです。野心家の友情にもこの錯乱が再発見されるでしょうが、それは実際には更なる賛美者しか望んでいないのです。それは愛することではありません。そうでないと美味しい食べ物を愛する様に私たちの内面で変わるための名誉を、それにとって置くこととなります。それに反して愛の自然な行為は、むさぼり食うことではないと言わなければなりません。つまり自分に立ち戻ることです。それは自分の愛とは別の中心を創造することと全く反対です。その中心はあらゆる野心と関係しています。従って愛することとは相手のために野心を持つに違いなく、私たち自身のことよりも寧ろその人の完全なものを考えるに違いありません。それ故にそれは、その人が驚嘆させられ、その人の役に立ち、助けられるのを望むのです。しかし、その人の役に立ち、助けて、驚嘆する人々の中で最高の段階を自分で望む時、驚嘆する幸福は愛の基本となるものです。この種の野心の原則でさえあると言えます。その驚嘆はそれを感じる人を大きく見せること、そして彼自身に示していることを忘れない様にしましょう。しかしながら、愛の熱情の全てをその様な感情に与えるには十分ではありません。愛の対象を自分から分けられない様にしなければなりません。それを自分自身で創り、殆ど発明したものでなければなりません。それは母性にもありますが、真の愛にも完全に必ずあります。どんな完成も育児嚢を忘れるや否や、虚弱になるのを見る程に大事にされなければなりません。従って、凡人が競争相手のお陰で花を咲かせる時、もしも不誠実が罰を受けたものでなければ、最早勝ち誇った誠実さ以上に気に入らないものは何もありません。ここでお分かりの様に嫉妬による苦痛はその時、身の破滅を招く愛の対象を見て憤慨します。そして同時に理解されるのは、もっと高貴な嫉妬という活動です。それはもっと品位のある別人の保護が、新しい美德によって発展するのが分かります。それは注目すべき場合であり、そこでは愛された対象の完成は悲しみの源泉です。そして更にその完成した別人に感謝して、別人そのものが合法的な主権を持った人物になりさえすれば、その上崇拜されることになり得ます。母親であること、育てたこと、何よりも先ず感嘆したこと、全ての中で一つだけ予想したり予感したりしたこと、それが残されている利点なのです。そしてその様なものが、従って競争相手たちの働きになります。

真実の愛は孤独の中で養われます。それ自体にある情動は行為に決して依存しなくても、全てを解決するのが幸福なのです。そして最も真剣な試練は私生活から生じるものです。その意味で体質的な調和は愛に対する条件の一つです。勿論、それは喜びと行為と思考との調和であり、それは愛にとっての第一の装飾であり、それが行うのは愛が愛の行為によって殺されないことです。偉大な愛の力は次の様に、快樂にも飽満にも恐れぬことで見分けられます。幸福は従ってこ

これらの低い条件を取り去り、そして喜んでそれらを乗り越えます。それ故に肉体的な愛である性愛に関して言われていることは、全てが本当の愛にとっての間違いです。例えば飽きること、疲れること、嫌いだから単調になること、新しい試行を考えること、等々です。愛の中で最も根強いものは、何ものも愛を弱めないという覚悟です。それはそうなることの誓いであり、そして誓いを守る喜びです。それは相手への容易で軽妙な幸せであり、その中にあるのは信頼であり、それはその中で評価される唯一の完成したものです。従って野心の無い愛は、無限の幸福を抱きます。新しい完成を想像することはありません。反対に現れないものを望むのを止めます。社会生活は単純化されたものになります。萱葺きの家と平和が望まれます。この主題に関してはレ・シャルメットにあるジャン＝ジャック・ルソーを幸福と見て下さい。全てが幸福にとっての好機でした。どんな仕事も構わずに最も美しく有益のようには見えませんでした。この幸福な状態には、屢々無駄な仕事を持たされたり、皆から一様に笑われることを行う不都合があります。何故ルソーは音楽を習ったのでしょうか。殆ど音楽を利用出来ることが少しもなかったのに、その様な状況の中で何故習ったのでしょうか。個人的な長所は、それが判断されるのが愛である限り何でもない様なものです。そして気に入られていた方法はどんなものでも何時も次に成功したことによって、その弱さに心打たれます。それらの愛情は伝えられるものではないのです。そして、完全に野心が無い時、まさにそれが愛であると判断します。（完）

第三十一章 寛大な愛

人は自分自身以上にもう一人の人物を愛することが出来ます。その時の最初の行為は、一瞥を受けるために先に身を投じます。部屋を飾ったり、着飾ったりするのも同じ意味があります。何故なら、どちらも美はその時、力強いしるしになり、素晴らしい適合が際立っているからです。海と空は両眼の中に映り、肉体の曲線と曲線は必然的にお互いに気に入ります。幸福と成功の様子は絶えず勝利を表します。寛大な愛も絶えずこの栄光を賛美します。その様なものは殆どが演劇の女王を愛し、女王を追い、仕えます。しかし、それは式典を行う男の行き方です。それは女王が奉仕を沢山必要としている、と彼が判断することではありません。寧ろそれは女王がそれらの奉仕を軽視しているかも知れないと彼は理解しているからです。「彼女は私のことを忘れて、統治すれば良いのだ」と男は言っている様に見えます。これは行進に際して自分を殺しているのと同じことです。そして、以上がまさしく絶対的忠誠です。彼は勝利しか見ません。自分自身の存在を犠牲にします。この正義は私たちが神に与えるものです。「私たちのためではなく、汝の栄光のために！」。

かくして父親は息子を世間に押し出し、一度も心配することなく、遠くから見とれています。その時の美は輝いて幸せそうに見えます。歓呼して迎えるために道を空けます。しかしながら休息や気楽な時には、美は更にもっと良く輝きます。美は幸福との約束であると誰かが言いました。美のための幸福であると理解しなければなりませんし、それは継続された美です。例えば歩行はダンスを予告しますし、頬は歌を予告します。その意味で、愛する男は彼が愛することの幸福はどんなものでも予告します。それらの前兆をそこから認識するのは彼です。事前に走って場所を作らせるのも彼です。先駆者は彼です。感嘆して見る者は自分の両眼を自慢します。彼は、彼が愛するものを愛する人々を愛します。彼は、高価な美に微笑する人々を愛します。それに反して、決して歓呼して迎えない人々を嫌悪します。彼はこの世から彼らを消したいのです。以上は高貴な嫉妬です。

愛する男は、輝く外観の下に潜り込んで喝采を楽しんでいると時々言われます。それは肉体の中の魂の様に、上手く潜り込むことです。それはもう一人が現れることになります。それは自分の場所で幸福になることであり、その美しい死骸に生気を与えるために自分の不在を殆ど利用することです。彼が無感覚で殆ど不在であることを望まれているからです。もしも彼が余りに楽しさを表しているなら、彼は恥ずかしくなるに違いありません。以上はもう一つの嫉妬です。セミラミス(1)は有難うと言わないことで愛されます。美は足りていることを望んでいます。それは脅かされていることに対する侮辱の軽減です。自分のために観念による危険を冒し、完成は仮面に合わせられ、高価な外観に全てを許します。かくして信仰には偶像崇拜があり、そして真の信者には一種の阿諛があります。美には人に好かれるのを無視するまで、美そのものが不在である様なことがあるのを認めなければなりません。その尊大さは新しい完全さとして愛されます。要するに英知が美に匹敵しないことを自ら許しません。これは卑しい賛美者たちと並んでいるかの如く

、自分を表さなければならぬのを憤慨する者以上に、大変に微妙な嫉妬です。これら全ての自尊心の微妙な差異は崇められます。そして確かにそれは、生命の無い存在の栄光を持つ形式のためではありません。真の美点のために愛されるのを主張することは些細なことではありません。愛することとは、勝ち誇った肉体の魂を自分に作ることです。

寛大に愛する者は、力のしるしである美を第一に信用します。そして次には公認の力となる賛辞を信用します。彼は、これ以上称賛すべきでないという嫉妬以外のものを知りません。最早、自由で魅力以上を望んで少なくとも内面的本質から確信している、彼の女主人公の本当の発展に気を付けるだけです。その中で自由に関する全ての証拠が幸福と共に受け入れられます。そして、大胆さは大変遠くから慎重さに移ります。従って成功は主要なしるしでさえなくなります。以上が真の栄光であり、秘められたものなのです。（完）

（1）セミラミスは、バビロニアの伝説上の女王で、バビロンの都に空中庭園を築いたと言われる。

第三十二章 感情が思想を変えるやり方

この表題を理解するには一つの方法だけではありません。お分かりの様に清められた純粋な感情は屢々、殆ど関係の無い意見とか思想を変えます。絵画に絶望した画家は恋をして、そして勇気を出して絵筆を再び握ります。それは余りに既知のことです。そしてその意味において私はこの章を進展させて、この主題にもっと近付いて行儀良くしていることでは決してありません。例えば大恋愛をすれば、私がもう思考しなくなった思想を形づくる様に導きます。私は最早不滅のことを思考する術を知らなくなり、それを信じなくなりました。しかし、今は永遠の魂を信じています。これから私は、常に存在するための権利をそれに与える完全なるもののことを幸せだと考えます。そして、この継続に関しての疑念は一種の不実になるに違いないと私は思うでしょう。それは最早私の魂の風土の中には無いのです。要するに私は愛するのと同じ程度に、私の永遠を信じているのです。それは私の誠実さでしかなく、誓ったことでしかないからです。それは私に保証を与えるものではないと人は言いたいのだと思います。しかし、私はそんなことを決して望んでいません。私が望んでいることは欲求を持たずに、足るということです。非常に気持ち良く過ごした後で、私は何回も何と多く、何らかの方法で私の祈りを取り消すことで〈大破壊者〉や〈時間〉に挑んでいたことでしょう。

おゝ時間よ！ お前の飛行を不意に捕らえろ！

従って私は、少しも有利でない状況を絶えず待っていたのです。しかし何故でしょうか。私の〈精神〉と名付けているものの中では全てがお互いに関連しているからです。あるいはもっと適切に言うなら、〈精神〉に対する変わらぬ属性はまさに一つであるからです。しかしながら実際にそして帰納的にはそうではありません。それは本質的に先験的にそうなのです。私は哲学に逃げている、と言われるでしょう。しかし哲学は、統一された職人である〈精神〉が感じたり思考したりする全ての人間に共通しているものである、と考えることを私に教えたのであると私は言います。私は繰り返して言います。「我思う、故に我あり。そして、彼思う、故に彼あり」。私の同類は考えますし、愛します。従って私は、彼が考えそして私が常に愛しているのを確かめているから、それらの最初の観念を支配する術を知っているのです。物質には決して支配されない様に私は誓います。しかし、それを調べてみましょう。私は必要性に従うことを決して誓いません。全く反対です。私が誓うのは、私に従わせないことです。誓うことの何を注意するのでしょうか、それは自由であるのを誓うことにあるからです。そしてデカルトが言っている様に、自由意志を決して忘れてはいけないからです。どんな愛の誓いであってもその様に行われます。でも、次の様に言うのは大変に滑稽であると認めて下さい。「もしも季節が、もしも湖が、そのことを言うのであるなら、私は愛すると誓います」。これは殆どまるで恋人が次の様に言っているかの如くです。「あゝ、私はあなたを愛する。私には大変に確かなことでしかない。弱い私が

あなたに保証するのは私です。あなたは私には必要で、私の運命です」。これらは悲嘆です。非常に失礼であることに人は気付きません。奴隸を持つことが大変な自慢であると思うのは、虚栄心による考え方が生まれているからです。これらの思考は全てが単純です。どんな愛にもその思考が形づくられます。私は既に言った様に、吝嗇家は自分の財宝を墓の中へ持って行きたいのです。その中で彼は寛大さを見せたいのです。（完）

第三十三章 善意

数々の思考は屢々安定性に到達します。悲しい時には自分の思考に手を着けないで、思い出すことが愛されます。自分を慰めるために他に方法は決してありません。この安定性は愛されま
すし、これが善意です。善は慰めるから善なのです。親切は親切そのものを誓い、出来事を乗り
越えているから親切なのです。

かくして人は愛の中に、或る積極的な休息を入れます。何度も行ったり来たりする数々の思
考は、何も重要ではありません。ヴァレリーは理性をもって言います。「行ったり来たりする様
な思考をあなたは無視しなさい」。この無視は偉大であるための一つの要素です。魂の状態は重
要ではありませんが、寧ろ愛が生まれる新しい魂が重要です。それは一種の宗教です。何故なら
希望のための支柱が必要であるからです。換言すればそれは全く不安定なものでもあります。そ
れは溶解するものであり、絶望を生む崩壊です。つまり心理学的な孤独です。活動を倍加させ
ることによって逃れます。その時は数々の証拠が蘇ります。もしもそのことを熟考するなら、そ
れは感情がそれらの証拠を齎していると言いながらも理解することであるのがお分かりになるで
しょう。しかし魂が、感情の中の丸々全てであることを忘れる必要はありません。どんな魂もそれ
らの証拠を齎しますし、懐疑論や人間嫌いへの攻撃につけ加えられる幸福な愛は決して発見され
ません。注目すべきことは、幸福な愛は愛することの出来るのを疑われる人間たちが、そのこと
だけによって人間たちを愛するように仕向けることなのです。私に類似するものは、考えると私
には快いものですが、その様なものの内容は不滅です。ここにあなたは樂園が現れるのを見ます
。諸宗教が回復するその企てはそこから始まります。証人が必要であるからです。魂のその証拠
は真実のもので、その上更にそれは偉大な魂であり、人はその魂に協力するのです。

(完)

私は、聖霊降臨の主日（ペンテコステ）（1）を説明した日のことを思い出します。そうです、炎のように熱心に語りました。その新しい精神とは何だったのでしょうか。私は既に言った事柄をもう一度言います。第一に父親の精神があります。しかしそれは自然と同じ法則のものです。父親は決して助けません。物質的支援しか与えないからです。つまり動かないのです。そこには正義や力が無い訳ではありません。力に対しては大変に明瞭ですし、正義に対しても同じ様なものです。人々は、私たちの美德と犯罪を断言する結果と関連しているものを内面的正義と呼んでいます。その様なものは神格化された自然です。少なくともそれは魂が無い様に私たちには見えます。神を小さくします。それは汎神論の結果である動物への崇拜において明白です。その様な物神崇拜は大変に一般的です。以上は自然への崇拜です。私がそれを観察したのは、活動的な精神の絶滅を嘆きながら絶えず鳥たちや木々に同情する誠実な人々の裡です。

誰にでもあるこの心の奥底を批判しなければなりません。活動的な精神は数々の定理に依存します。もしもあなたが帳簿を記す商人とか紡績工場主の信頼性に関しての損得勘定をしたなら、大変にびっくりさせられることでしょう。そこにはまさに彼の名に値する不誠実さがあります。この野蛮な人類全体は魅力の無い神を形づくって、樂園を曖昧にします。その時は最早、修正の観念や改良された崇拜しかありません。汎神論的なこの世界はどんなものでも神そのものの手へ委ねる神の必然性を想起させます。そして確かにその〈子〉によって生まれた〈新しい書〉による〈説教〉は、この必然性の奥底が信仰の無い人間に止まっているものでしかないのです。救済という二番目の段階は余りにも有名です。それは現代にも通じています。ところが三番目の〈精神〉が進行中で、もしもそれが認められないとしたなら、〈神の子〉の精神の同じ一撃を認めないことを私たちに告げるのは〈説教〉そのものです。

この三番目の〈精神〉に私は、一種の軽薄さによってびっくりしました。それは感動させて、再び熱くなり、既に出発しました。現代人が精神と名付けるのを認めない訳にはいきません。精神は軽快です。精神は真面目さという重圧を取り除きます。それは天国への深淵の様なもので、私たちにおける信頼の中に私たちを投下します。しかしながら、神の〈必然性〉は何時も私たちから離れません。それどころか〈神の子〉の魅力も、産業によるその必然性から私たちを救済するための一つの意志なのです。それ故に、そこには私たちの富の明細目録がざっとあります。お分かりの様にそれは全ての人々にとって平等の精神であり、〈笑い〉の奇跡でもある〈精霊〉を忘れることが、沢山のことを間違えることとなります。この前面では産業は証拠として大変に小さく、それらの記念建造物が大変に心配です。既に一度、私たちは思考の不十分さを評価していますし、情操を当てにします。しかし自己を保証された情操が、魂の軽さや神の幸せな愛を果たしていたことを、その前に誰が信じたのでしょうか。従ってこれこそが信じなければならないことです。そしてスピノザは、彼の大変に厳しい必然性による一種の反響によって、沈思黙考による注解の中で生きることの喜びや、喜びによる救済を勧めるに至ります。でも、プラトンには悲

しみがありませんでした。私たちはプラトンの微笑を忘れたのだ、とラニョーは或る日言いました。私たちは広大な大洋の上で一頁を開くことが出来る様になります。両翼と一緒に勇気を思い出します。そこには真面目な沈思黙考という主題があります。ここの偉大な牛乳缶(2)を私は〈神の兵隊〉と名付けましたが、神の意志を認めた時、神よりも早くその意志を行うことしか重要でなかったという習慣があったのです。以上は干し草を乾かす様に、習慣が必要性をひっくり返すやり方です。以上が、まさに聖霊降臨の主日の季節になります。もしも神が、私たちに送る言葉がヘブライ人の真面目さと矛盾するなら、折り合いが付くのは神の処です。善意は私たちに穂の冠を被らせる様になります。クリスマスの祝福は実際に不幸そのものから回復させます。〈退屈な冬至〉です。四季は復活祭や聖霊降臨の主日の輝きの様なものです。農民になって考えましょう。それが人間の真実になります。(完)

(1) 聖霊降臨の主日(ペンテコステ)は、キリスト教で使徒に精霊が降臨したことを祝うものであり、復活祭の五〇日後(第七日曜)に行われる。復活祭は、春分後の最初の満月後の最初の日曜日と定められている。

(2) 牛乳缶(Berthe)は、シャルルマーニュ(七四二~八一四)の母(Berthe)の名からとった言葉である。シャルルマーニュはフランク王(在位七六八~八一四)で、西ローマ皇帝(在位八〇〇~八一四)として西方キリスト教世界を統一した。

私たちが真理の恒久性を思考したことは重要です。全ての対数は役に立つものを支えています。全ての学問は僅かな科学を支えますが、既にそれを越えた天井を作り出しています。しかしながら、この巨大な広がりには絶えず思考されます。そして、そこにあるのは詳細に至るまで一つ一つが不滅です。思考することは全く単独でも、些細なことではあり得ません。それではまさに不幸に違いありませんし、火のように駆け回ります。しかし反対にそこでは休息しますし、スピノザに再発見するのは思考の広大さです。何という知覚であり、定理であり、本質なのでしょう。私は、人が自我を無くしてそこで思考するのを確認します。この真理全体は謂わば人間の問題です。「人間は神に泣きわめく」。これの全てを否定することが出来ます。それはトランプで組み立てた城や移り気の愛に戻ることです。人が知る限りスピノザは思考することしか望みませんでした。従って感情から出発しないで、彼は感情に到着して、そして常に必然性によって一貫していました。同様に彼の経験は思考であり、そして思考による成り行きで分割します。有名な三パターン(1)はお互いに最後には相殺されます。そうでないとするなら、哀れな無知な人はそれ故に道に迷うのでしょうか。世界は十分にそれに答えています。スピノザにおいては世界が欠けていたと言われていましたが、その学説は無世界論なのです。しかし、存在が本質を前提にしていることは注意されませんでした。従って神は、先ず人間の完成者の如く思考によって作られているのです。かくして人間は世界と交渉を持ち、生活の基礎を築きます。何本もの支柱に基づいて教会を支えるのは極めて正しいことです。何故なら教会は神のイマージュであるからです。二つのものに人は止まっていることが出来ません。一方は神であり、理解されるために如何なる生活も必要としません。そして、もう一つは世界の外観ですが、従って存在しないでしょうし、薬を受け取ることも出来ないでしょう。以上は偉大なる告白です。もしも私たちが結論を引き出したなら、以上は哲学になります。人間は思考します。人間は神の裡や全ての裡でしか思考することが出来ませんし、小さくても不屈の組織体にさせます。その様なものが偉大な学説の精神です。それはデカルトを徹底的に押し進めるものであり、マルブランシュ(2)の逆説を生むものであり、そして三つの言葉によるボシユエ(3)の憤慨を生むものです。それはどんな思想も単純に〈教会〉から追い出します。例えばトマス(4)やアウグスティヌス(5)の思想があります。しかし、思想は決して追い払われる儘になっていません。そしてジャンセニスム(イエズス会の教義)は世界の立法者です。スピノザは実験に基づいた方法を探究したのです。もしも空想家の名に値したくなかったなら、まさにそうしなければならなかったのであるとラニョー(6)は言いました。かくしてスピノザの学説は神学の下で流布します。この学説がなければ、理解に欠ける非宗教の人物に関しての奥深い真剣さは認められないでしょう。デュヴェルジュ・ド・オランヌ(7)と馬に乗ったヤンセニウス(8と民衆の方へ戻る人を見て下さい。このことは唯一の宗教的危機であり、デカルトの最後の効果です。それは注目すべきことであり、主任司祭たちは常に疑わしい人だったのです。数々の迫害は教会による肉体的な単一性に作り変えます。アルノー家(9

）やラニョーやデジャルダン（10）の奥深さは、思考の中に恐ろしい程の責任と〈教会〉の記念建造物への注意に気付くことに戻りますが、結局のところは署名することを拒絶することにあります。それは美しく、まさしく異端への拒絶です。ジャンセニストのスピノザは孤立します。人は交渉を持ちたくないと思います。ところが彼だけは交渉を持っているのです。（完）

（1）スピノザは認識を、感性的、理性的、直覚知の三パターンに分割した。

（2）マルブランシュ（一六三八～一七一五）は哲学者でオラトリオ会修道士。デカルトの物心二元論の克服を目指し、機会原因論を主張した。

（3）ボシュエ（一六二七～一七〇四）は聖職者で説教家。仏文学史上最大の雄弁家の一人である。

（4）トマスは十二使徒の一人で、復活したキリストの体に触れて信仰を告白した。

（5）アウグスティヌス（三五四～四三〇）は初期キリスト教会最大の教父で教会博士。『告白』『神の国』を著した。

（6）ジュール・ラニョー（一八五一～九四）は、アランがヴァンヴ高等中学校時代の哲学教師で、思想的に大きな影響を受けた。

（7）デュヴェルジュ・ド・オランヌ（一五八一～一六四三）は神学者で、ヤンセニウスの盟友としてジャンセニズムの布教に努めるが、リシュリユーとイエズス会により投獄された。

（8）ヤンセニウス又はヤンセン（一五八五～一六三八）は、オランダの神学者。『アウグスティヌス』を著し、神の恩寵の絶対性を説き、ジャンセニズムの理論的基礎を築いた。

（9）アルノー家はジャンセニズムを擁護し、傑出した人物を輩出した。

（10）デジャルダン（一六四〇～九四）は、オランダ出身の彫刻家で、ルイ十四世に仕えヴェルサイユ宮殿の彫像を創った。

陶酔は明らかにされていない言葉です。陶酔は確かに情動の一つの感情です。私はそこに怒り易い軽薄さを見ます。それ故に、もしも幸福が軽々しく空中に無いとするなら、幸福とは何でしょうか。もしも眩いものでないとするなら何でしょうか。もしも夢想でないとするなら何でしょうか。陶酔にはこれらの性格が全てあります。酒による陶酔は些細なものでしかありません。勿論、怒りにも陶酔はあります。希望による陶酔もあります。不幸の陶酔もあります。絶望の陶酔もあります。あらゆる場合において陶酔は興奮による行為の一つです。その興奮が反応となり、その反応によって情動が保たれているのです。情動は私たちを動かします。そこには感覚を備えた人間の行為と恐怖と心の最初の法則があります。でも、敢えて思考しませんし、感じようともしません。従ってそこには何でも無い無意識があります。この陶酔状態の思考を受入れなければなりません。それは常に感情と共に打ちますし、その中で思考そのものに打たれます。そこには信仰が恐くなる理由があります。換言すれば私たちは何時、如何にして未知の空間に投げ出されるのでしょうか。宗教は、宗教による一つの恐怖です。そして、その恐れが所謂英知の始まりです。人々は思考するのが大嫌いです。思考の中に信頼が無いのです。彼らは自己から逃走します。この陶酔は一つの敗走です。決して何も思考しない性格が作られます。その時は死骸になるまで少しずつ強張ります。動かすと危険を負う言葉の数々を拒絶します。愛も拒絶します。愛したことも酷く嫌います。狂信的に生きますが、ご存知の様に子供は否定します。否定することを激怒しますし、思考の中には最早完全にいないのです。石への〈瞑想〉の様であり、人生の最期です。それは如何なる意味でも不滅に近付くことになり得ません。地獄とは、人生を拒絶するものであり、永遠の人生も拒絶するものです。シャベール連隊長は、シャベールと呼ばれるのを望みませんでした。まさしくヒッポリュトス(1)です。今度の彼は今にも死にそうでした。思い出の拒絶は、思考の深遠さの一つです。

思い出よ、おゝ火刑台の金の風が私に向かう。

私の眼には、この炎はヴァレリーの顔を焼いたものです。そして、火刑台のこの危険に対して自然は私たちに陶酔を与えます。つまり、それは葡萄酒であり、阿片であり、全てのものへの巨大な拒絶です。結局のところ彼はまさしく、あらゆる思考が変装された思い出であるかも知れないからです。でも、決して認めないで下さい。一種の諺を言いなさい。言い換えれば、あなたは自分に生きることを許さないで下さい。そこからは神学者の思想がやって来て、悪魔が人生を拒絶します。確かに彼は後悔しないでしょう。それ故に永遠の苦しみが頑固なものになるのです。

(完)

(1) ヒッポリュトスは、ギリシア神話でアテナイ王テセウスの子。義母パイドラの邪恋を退けたため、海神ポ

セイドンに殺された。

現実を判断したい時は、それらの結果を斟酌しなければなりません。もしも最も文明化された人々の間でその人間たちを考えたいなら、彼らの腕の先にある両手と同じ様に、彼らの裡では強く祖国が働きかけることに気付くことでしょう。それは愛のものであるという一つのイマージュを私たちに与えます。乾いた魂と愛と国民、つまり祖国と国家を持つ者たちにとっては決して行動しないものであり抽象的なものです。もしもそれらの現実の結果によって、一人ひとりにとっては運命を生むことになる過去の感情や感激や狂信が描写されないなら、間違っ書ることになります。それどころかフン族(1)は狂信者たちであり、心の裡では征服者たちでした。今後は、楽園や報酬や懲罰、結局のところ永遠の人生という観念がアフリカとかスペインと同じ様に、現実であるかどうかを私たちは自問しましょう。宗教的思想はこの種の人間の裡では消えかかっていますが、それは地上に舞い戻る不屈の観念を至る所に持ち運び、そして国境や道路や要塞を幾つもそこに命じます。その様なものとしての観念を、確実に眼に見えない必然性を忘れずに述べなければなりません。しかし、それは何でしょうか。必然性が常に眼に見えないことはないのでしょうか。神は眼に見えませんが、神の無い世界には現実もありません。従って、例えば不滅は観念でしかないと決して言うてはなりません。恐らく不滅も眼に見えない現実です。眼に見えないものは精神を前提にします。そして、眼に見えない多数のものによって起こるのは、長く続く聖霊降臨の主日であり、第三の世界です。それは〈使徒たち〉のものでもあります。結局のところ、心の〈冒険〉は信仰に従って創造を生みますし、〈人間性〉がその後に残り残って煌めいて閃光を放っている、眼に見えない精神であることが分かります。人は尋ねます。「私たちは何処へ行くのであろうか」。私たちは存在する処へ行くのである、と〈精神〉は答えます。その観念とは別の、未来の観念はないのでしょうか。時間のことを思考する労苦を自分に与える時には、どんなに長い絵画も明白になって来るでしょう。(完)

(1) フン族は、トルコ・モンゴル系民族で、四、五世紀にヨーロッパに侵入して、ローマやガリアを脅かした。

時間は私たちのあらゆる思想と結ばれています。この主題で犯すかも知れない誤りは、時間は逃げ去る、と信じることにあります。それでは何処へ逃げ去るのでしょうか。時間が絶えず流れているのを私たちは知っています。無限を動かない時間であると想像しない様にしましょう。それでは動かないのは過去でしょうか。でも、現在も未来も未だその儘です。ところでそれらの全ての時間に関するその本質は、確かに流れ去って行きますが、決して逃れるものではありません。私たちの全ての思考の状況、従って私たちの魂の状況を十分に熟考する者は、観念の中の観念、つまり絶えず変転して自分自身に逃れられない人間の観念を持つのでしようが、それは存在しなかつたりあるいはこれから存在するであろう時間において詭弁も無く飛び上がることはありません。幾つもの世界が思考する者の部分を創っています。私たちは時々、誰も思考しなかったことを思考しようと努めます。しかしながら、それは想像力でしかありません。私たちの内奥は私たちに縫いつけられています。それなのにそれは決して素材ではないのです。まるで精神の発展は議論に依存しているかの如く、その中で議論されます。しかし、それは何ものでもありません。私たちは至る所で私たちを支える時間に結び付けられています。そして私たちの夢想も至る所で支えられているのです。歴史も一つの大きな現在の足跡であり、単なる過去のものではありません。天の下に新しくものは何も無い、と諺にもあります。すると、内容の無いものは決してない、とまさに昔の賢者は言っていました。他方では、何が起きても前にあったものが発展しただけである、と言っていました。もしも思考したいなら、従って過去も現在も未来のことも、全体を伝えなければなりません。それは全てのもを支える感情として一瞬のうちに現れます。スピノザは、私たちが自分を永遠と感ずるのである、と理性をもって言いました。そこには人間を救済するものがあります。一般的な思考と現実的な慰めがあります。それは私たちが解読しようと努める星空よりも驚く程のものではありません。外観がその人間と一致する瞬間がやって来ます。星々も数々の世界も、私たちの休息や魂の状態のイメージなのです。「永遠は私の岩である」と旧約聖書の詩編(1)では言っています。しかし、岩とは何でしょうか。岩も無限の時間の中ですり減らしていることを認めなければなりません。かくして変転についてのこの議論は、常に私たちを時間に関する全てのものに立ち戻させます。そこから神は私たちの思考による必然的な対象であり、そのためにそれはヘラクレイトスの流転に絶えず自らを投げ入れます。常に自らやり直す外観として哲学者の思想を把握して下さい。この様なものが真の信仰であり真の崇拝ですが、私が自分自身のために持つのが情操です。一冊の〈本〉として老人が忍耐力の無い若者に読ませるこの偉大な教義に、最後には全てが収斂するのです。少なくとも、これと同じ内容を持つ外観を常に連れ戻すための熟考によって、自分に誓わなければならないのです。

(1) 詩編六二に「神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない」とある。

この翻訳は、フランスの哲学者アラン（一八六八～一九五一）が一九四五年にアルトマン社から刊行した『心の冒険』Alain, LES AVENTURES DU CŒUR の全訳である。テキストとしては、Alain, Les Passions et la Sagesse (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960 に所収されているものを使用している。

アランは『心の冒険』を一九四五年七月五日に刊行したが、実際に書かれたのは十年以上も古く、一九三五年十二月一日付けのマリー・モール＝ランブラン夫人への献辞の中で次の様に記している。「情熱の体系的な概論は、私の教育によって少なくとも一度は生まれるが、それはまだ形式を見出していなかった。私が考えついた表題は〈心の冒険〉……」。つまり『心の冒険』は、人間の感情の中で最も高次で崇高な感情と言える情操の段階にない者のために書かれたものと言えるだろう。ここで少し感情についてアランが如何に思考していたかを、熟読玩味して戴くための予備知識として説明して置きたい。

アランは感情を〈情動émotion〉〈情熱passion〉〈情操sentiment〉の段階に捉えている。情動は、感情の中で最も低位にあり、殆どの動物にも所有されている感情であり、怒りや驚きなどの様に短時間で消滅して仕舞う感情である。それに対して情熱は、情動よりも高次で長い時間に亘って持続して行く感情であり、愛や好意を感じたりするものであるが、その反面恨み辛みを抱くものでもある。又、動物の中でも馬や犬の様に調教が可能な動物にも所有されている感情である。そして、最も高次な感情が情操である。この感情は詩や思想などを生む感情であり、人間だけに所有されているものである。例えば情操教育とはまさに人間だけが所有する最も高次の感情を養成する教育でもある。

『心の冒険』は、従って未だ十分に情操の感情を所有していない者のために書かれた作品と言えるかも知れない。第一の対象は未だ大人になっていない若者たちであろう。第二の対象には情操の感情を所有していない大人たちが挙げられるであろう。就中、政治家たちである。何故なら、そういう人間は政治家たちに多いとアランは言っているからである。二十一世紀の現代の政治家たちを見ていると、一層その感が強く感じられて仕舞うのは私独りではない様に思う。

あらゆる独裁に抵抗するアラン、常に現代を熟考したアラン、そして永遠の感情である情操を生きるアランの言葉は、動物化された現代世界に、熟考された貴重な清涼溢れる風を送ってくれるに違いないと感じている。有閑の人ばかりでなく、多忙な毎日を送る人にも少しずつで良いからは是非とも玩味して戴きたい一冊である。

なお、表紙の写真は訳者が二〇一二年四月に撮影した、エトワールの凱旋門からエッフェル塔方面を見たパリの風景である。

アラン
心の冒険（下）

2017年5月23日登録

<http://p.booklog.jp/book/114713>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114713>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト